

楽 曲 紹 介

解説=野本由紀夫

6/24

バーンスタイン(1918-1990)

『キャンディード』序曲

今年、レナード・バーンスタイン(1918-1990)の「生誕100年」である。彼自身は、指揮者としてではなく、作曲家として名を残したがっていた。

『キャンディード』は、1956年12月1日に発表されたブロードウェイ・ミュージカルだ(あの名作『ウェストサイド・ストーリー』の前年)。原作は、18世紀フランスの詩人で哲学者のヴォルテール(1694-1778)の風刺小説『カンディドまたは楽天主義』(1759)である。カンディドとは、「無邪気な人」とか「お坊ちゃん」といった意味。

原作の内容はかなり思想性が強く、18世紀半ばの理想とされた「いまあることは天の配剤による最善の世界」という楽天主義思想を、痛烈に風刺したものになっている。このような「高尚な内容」だったため、ブロードウェイではわずか73公演で上演が打ち止めとなった。

『キャンディード』の脚本はリアン・ヘルマンが書いたが、当時はマッカーシー上院議員らによる「赤狩り」(マッカーシズム/左翼の徹底的な摘発・弾圧)が吹き荒れたところで、ヘルマンも共産主義者として告発された。そうした困難のなかで完成された作品である。初演後も何度となく楽譜は改訂され、楽器編成を含めかなりの異稿が存在するが、現在は1957年初演版に校正を加えたものが公式に使用されている。

【作曲年代】1956年 【初演】1956年12月1日、ニューヨークのブロードウェイ(ミュージカル版)、1957年1月(オーケストラ版序曲)。

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、エス[E♭]クラリネット、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、テナー・ドラム、大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン)、ハーブ、弦楽5部

ガーシュウィン(1898-1937) ラプソディ・イン・ブルー

ご存じ「ラプソディ・イン・ブルー」は、アメリカが生んだジャズとクラシックの融合作品である(1924)。バーンスタインもユダヤ系アメリカ人だったが、ガーシュウィンもウクライナ系ユダヤ人であった。

この曲はいわば、だまし討ちで作曲されることになった。1924年、ジャズ王ポール・ホワイトマンが勝手に「ガーシュウィンが『現代音楽の実験』コンサートのために作曲中」と新聞広告に載せてしまったのだ。寝耳に水だったガーシュウィンだが、ボストンへ向かう汽車のなかで、鉄道のリズムからこのラプソディの着想が突然ひらめいたという。

まだオーケストラ作品を書いたことがなかったので、ガーシュウィンは数週間でまずピアノ2台用の譜面を書き上げる。ホワイトマン楽団の専属アレンジャーを務めたグローフェ(1892-1972)にアレンジを依頼するが、最初は、10数名の少人数バンドとピアノのための編成であった。グローフェはのちに(1926)、大編成オーケストラとピアノ独奏のために再編曲した。

全曲はまさにラプソディ(狂詩曲)風で、自由奔放なメドレーである。オーケストラ部分とピアノの単独部分に明快に分かれるが、オーケストラの軽快なジャズリズム、ピアノの即興(インプロヴィゼーション)に近いカデンツァなどを経、聴きどころ満載だ。

【作曲年代】 1924年1月4日から2月12日(2台ピアノ版)。1924年、グローフェにより独奏ピアノと小編成のジャズ・バンド版に編曲。1926年、グローフェにより独奏ピアノと大編成のオーケストラ用に再編曲。今日演奏されるのは、1942年のフランク・キャンベル=ワトソンによる校訂版。

【初演】 1924年2月12日(リンカーンの誕生日を記念して)、ニューヨークのエオリアン・ホールにて、ガーシュウィンのピアノ独奏、ホワイトマン楽団による。

【楽器編成】 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール)、アルト・サクソフォン2、テナー・サクソフォン、弦楽5部、独奏ピアノ

レスピーギ(1879-1936)

リュートのための古い歌と舞曲 第3集

20世紀初頭にイタリアで活躍した作曲家、レスピーギ(1879-1936)の編曲作品。彼は、ポーロニャで生まれ、同地の音楽院でイタリア器楽運動の先駆者、マルトゥッチに師事した。

レスピーギは1913年にローマの聖チェチーリア音楽院の教授となると、同音楽院所蔵の古い楽譜を研究し、イタリアの音楽的遺産を現代に蘇らせようとした。

なかでも『リュートのための古い歌と舞曲』は3つの組曲が作られ、弦楽合奏による第3集はもっとも名高い(1931)。

第1楽章「イタリアーナ」 16世紀末の作曲者不詳のリュート曲が原曲。イタリア風の流麗な旋律が美しい。

第2楽章「宮廷のアリア」 17世紀初頭、フランスの音楽家ジャン＝バプティスト・ベサルが出した曲集から、リュート伴奏による歌曲など、複数の曲が選ばれてメドレーとなっている。

第3楽章「シチリアーナ」 全曲中もっとも有名な楽章。作曲者不詳の16世紀末の曲による。ただ編曲しただけでなく、さらに2つの変奏を続けている。

第4楽章「パッサカリア」 原曲は、ロドヴィーコ・ロンカッリの曲集中の曲(1692年出版)。レスピーギの編曲は、弦楽器の重音奏法がなかなかにもずかしく、劇的で壮麗な音楽が展開される。

【作曲年代】 1931年 **【初演】** 1932年1月、ミラノでレスピーギ自身の指揮。

【楽器編成】 弦楽5部

レスピーギ(1879-1936)

交響詩『ローマの松』

オットリーノ・レスピーギ(1879-1936)の交響詩『ローマの噴水』(1914-1916)『ローマの松』(1923-1924)『ローマの祭り』(1928)、いわゆる「ローマ三部作」のなかでも、もっとも親しまれているのが『ローマの松』である。イタリアからアメリカに移住した大指揮者トスカニーニ(1867-1957)が、この作品を好んで演奏したことも、この曲を世界に広める原動力となった。

イタリアといえば、なんといっても「オペラの国」である。そのため、交響的作品をはじめとする器楽は、いまひとつ振るわなかった。そこで、20世紀初期のイタリアの作曲家たちは、器楽ジャンルの復興をめざした。

なかでももっとも国際的に成功したのが、レスピーギである。一時期ロシアで「オーケストラの名匠」リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)から色彩豊かな管弦楽法を学べたことも大きかった。

こうした近代的オーケストラ表現の一方、さきほどの『リュートのための古い歌と舞曲』のように、レスピーギはイタリアの伝統文化やローマの風物や遺跡にも靈感を求めた。なお、4つの曲は途切れ目なしに、続けて演奏される。

第1曲「ボルゲーゼ荘の松」 ローマ中心に位置する、17世紀のボルゲーゼ公の館。その庭園の松林で、子供たちが輪になって踊ったり、兵隊さんごっこをして遊んだりしている。メロディは民謡で、コントラバスなどの低音楽器が登場せず、打楽器が加わって、子供の甲高いにぎやかな様子が目に浮かぶ。

第2曲「カタコンベ近くの松」 急転直下、初期キリスト教時代の古代ローマにタイムスリップ。2世紀から7世紀にかけて迫害されたキリスト教徒の、カタコンベ(地下墓地)を取り囲む松の木陰が見える。その奥底からは、悲嘆にくれた聖歌が聴こえてくる。舞台裏で吹奏されるトランペット独奏のメロディは、グレゴリオ聖歌のサンクトゥス(感謝の賛歌)の一つ。

第3曲「ジャンニコロの松」 ジャンニコロの丘はローマ西南部にあり、ローマの街を一望のもとに見渡せる。古代から一気に近代へタイムスリップする。そよ風の吹く中、満月の光の中に立つ松。ピアノ独奏がたいへん美しく、フランス印象派的な響きによる緩徐楽章となっている。最後は録音による夜鶯の声が聴こえて

くる。指定の録音は、レンタル楽譜に同封されている。この発想は、マルチメディア芸術の先駆けといえよう。

第4曲「アッピア街道の松」 夜明けのアッピア街道に立つ孤独な松をとおして見た、古代ローマの幻想。初めは遠くにいたローマ軍の行進が、昇る太陽の輝きのなか、凱旋の行進として少しずつ近づいてきて、神聖街道を疾走していく。最後はステージとは別に配置された金管群もファンファーレに加わって、音のるつぼのなか、輝かしく全曲を閉じる。

【作曲年代】 1923～1924年 【初演】 1924年12月14日、ローマにおいてベルナルディーノ・モリナーリの指揮。

【楽器編成】 フルート3(ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(太太鼓、タンブリン、トライアングル、小シンバル2、シンバル、タムタム、ラチェット(むち)、グロッケンシュピール)、ハープ、チェレスタ、ピアノ、オルガン、弦楽5部 / **バンド(舞台裏)**:トランペット4、トロンボーン2、夜鶯の声の録音

のもと・ゆきお(指揮・音楽学)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。オーケストラ指揮者として、音楽史に埋もれた作品の世界初演を数多く行ってきた。昨年末は、1000人の第九を指揮。今年は2回指揮する予定。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」「ららら♪クラシック」、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員ほか。鑑賞教育理論の第一人者として全国各地の講演に呼ばれている。昨年、ブラームスの交響曲の全曲解説が、全音楽譜出版社から出版された。